

本書を以下の方々に捧げたい。

ベレット・ケーラー出版社のステイブ・ピエールサンティと素晴らしいスタッフに。本書のプロジェクトを提案し全身全霊でサポートしてくれた。

イエス！誌のスタッフと役員に。人間の可能性に関する新しいビジョンを世界に向かって発信しようとしている。

「地域経済活性化に向けた企業連合」(BALLE)のスタッフ、理事、地方ネットワークの会員に。ニューエコノミーを構築しようとしている。

「政策研究所」のスタッフに。ニューエコノミーの政策アジェンダを策定し、それを支持してくれる政治連合の結成を後押ししている。

何百もある草の根グループに。一般大衆の経済教育と政治的動員を行っている。

そうして、ウォールストリートの海賊共と私掠船に。そのシンボルであるバーナード・マドフを含む。彼の非道は金融システムが修復不可能なほど腐敗し、現実離れしていることを暴露した。このような連中がいなければ、「ウォールストリートを閉鎖せよ」というこの呼びかけは馬耳東風に終わることが確実であろう。

序文

二〇〇八年にウォールストリートが崩壊し、その後の救済努力も失敗したことで、これまで基本的なことであったにもかかわらず、久しく質問されることがなかった以下のような基本的問題に関して、国家的な議論を始めるのにまたとない好機である。

① ウォールストリートの金融機関は自分達の犯した非道の結末を救済してもらうために、国家の財布の紐を緩めてもらい、何兆ドルもの資金を注入してもらうに値するほど、何か国益にとって重要なことをしているのだろうか？

② ウォールストリートの組織全体は実体がないにもかかわらず、社会全体にとって経済的・社会的・環境的に大変な重要性をもっているという幻想の上に建てられているのではないだろうか？

③ 必要で有益な金融サービスを、他のより効果的で低コストな方法で提供することができるのではないだろうか？

宙ぶらりんの状態を排するために、先に答えを言っておけば、①ノー、②イエス、③イエスという

ことになる。

金融危機にかかわる議論のほとんどは責任のなすりあい終始している。犯罪行為をしていたのはだれだ？ 証券格付けの不正はだれの責任か？ 必須の規制を後退させたのはだれの責任か？ どの規制当局が勤務中になぜ眠りこけていたのか？ 大勢の人々が規制の強化と監視の厳格化を要求している。何人かは以下のように、ウォールストリートで最強の金融機関における腐敗を詳細に暴いた本を出版している。例えば Dean Baker 著 *Plunder and Blunders*¹ & Kevin Phillips 著 *Bad Money*²、Charles Morris 著 *The Trillion Dollar Meltdown*³ など。

しかし、このような本の著者であるベーカー、フィリップ、モリスを含め、いかなる評論家からも、ウォールストリートと決別して違った価値観と制度に基づくニューエコノミーを構築することも、金融危機の解決策になる、という提言はまだ見聞きしていない。

私が高書を執筆した理由は、沈黙を破って、今のところ口にされていないこの可能性に関して議論を始めるためである。本書は特に、なぜ経済的・社会的・環境的にこんなにひどい状況に陥ってし

- 1 Dean Baker, *Plunder and Blunders: The Rise and Fall of the Bubble Economy*, Polipoint Press 2009
- 2 Kevin Phillips, *Bad Money: Reckless Finance, Failed Politics, and the Global Crisis of American Capitalism*, Penguin (Non-Classics) 2009
- 3 Charles R. Morris, *The Trillion Dollar Meltdown: Easy Money, High Rollers, and the Great Credit Crash*, PublicAffairs 2008 [邦訳：『なぜ、アメリカ経済は崩壊に向かうのか…信用バブルという怪物』チャールズ・R.モリス著、山岡洋一訳、日本経済新聞出版社 2008年)

まったのかを深く理解したいと願い、破綻した金融機関に一時しのぎの手当てをすることを超えて真の解決策を探求している人々を念頭において書かれている。

以下では、本書が誕生するに至った一風変わったストーリーを手短に紹介しておきたい。

二〇〇八年秋、マイケル・ラーナー師から「ティックン」⁴誌に、二人の有力な経済学者が出版した本について書評を書いて欲しいとの依頼を受けた。同師の導きもあって、結局、その書評記事は金融崩壊が進展しているなかで、わが国の経済システムについて基本的な再設計を要求し、オバマ大統領が演説で明らかにすべきニューエコノミーのためのアジェンダを提案するものとなったのである。その記事を書いている間に、「イエス！」誌の編集者であるサラ・バン・ゲルダーとダグ・ピーベルから、議会で可決された救済策に関するコメントとしてではあるが、ニューエコノミーのためのアジェンダの概要をも示す記事の寄稿を要請された。ティックン誌とイエス！誌の記事はともに、二〇〇八年一月の大統領選挙直後に掲載された。それが本書を書くお膳立てとなって、私は両記事をベースに自由に翻案した。このような先見的な雑誌の編集者が私にくれたチャンスとガイダンスに深謝したい。それがなければ本書は日の目を見なかったであろう。

一月二四日の夜遅く、拙著のなかで最も広く読まれている本で一緒に仕事をした経験のあるベレット・ケーラー出版社の社長兼編集人であるステイブ・ピエルサンティが、電子メールを送ってよこし、イエス！誌の記事を読んだが、小さな本にでもして、そのメッセージをあまねく広める手

4 訳注：「再生、修理」の意。

伝いをしたいと申し入れてきた。

翌朝、妻のフランと相談した上で、夕方、ステイブに電話した。その際に、オバマ大統領の就任式直後となる二〇〇九年一月二三日を発行日にするという制作スケジュールが決まった。それはウォールストリートの心臓部に位置する歴史的なトリニティ教会が主催する全米神学会議で、私が基調演説をすることになっていた日である。ウォールストリートや富の祭壇と決別することをアピールした本を発売するのに、これほど好都合な時期と場所を想像するのはむずかしい、ということであれわれの意見は一致をみた。

この企画でベレット・ケーラー社のチームは活気づき、私と一緒にチャレンジを受け入れることにした。プロジェクト開始から、発売に間に合うようトリニティ教会に本を搬入するまでの時間は八週間だ。私は過去の著作を適宜援用するとともに、新たな仕込みを大量に行って、原稿を完成させなければならなかった。編集、デザイン、制作、印刷は二、三週間で済ませなければならぬ。にもかかわらず、全関係者の緊密な共同作業を通じて、すべての要素が統合され、鮮明で力強い統一体が完成したのである。

本プロジェクトは私がベレット・ケーラー社の方々、妻のフラン、同僚から頂戴した甚大な支援に負うところが大きい。ステイブ・ピエルサンティは私が起草することに各章を読んで、貴重なコメントをくれた。マイケル・クローリーは休暇の時期を変更して、表紙の文章、賛辞、宣伝材料を取りまとめくれた。原稿整理係のカレン・セリグチは一〇日間にわたって、原稿を完成させるべく私

と文字通りベツタリ付き合ってくれた。

本書には伝えたい明確なメッセージだけでなく、あたかも死刑執行のような明確な締め切りがあったため、気持ちを集ませることができた。そのメッセージとは次の通りである。「ウォールストリートを閉鎖して、メイנסトリートを基盤としたニューエコノミーを構築する。新しい金融システムはそのニーズを満たすことに専心する」。

締め切りが厳しかったことと論点が明確だったおかげで、ウォールストリートの複雑で多種多様な金融上の企みや不正を抉り出したという衝動も抑制することができた。ウォールストリートがゆとり集団で、何の有益な機能も果たしていないのに、社会に耐えがたいコストを課していることがひとたび明確になれば、正確にはどのような不正が行われたのかという古い詳細の記述はまったく心配する必要などないだろう。詳細が知りたい人のためには、前述したようにベーカー、フィリップス、モリスによる著書がある。本書はもっと大局的な構図を示したものである。

出版の締め切りに向けて本稿を執筆しながら、私は自分が本書を書くために全人生を準備してきたのだということに気づいた。保守的な小さな町で育った私は、そこで家族、地域社会、自然、発展途上国の特徴である極端な富裕と貧困がない中流階級の民主主義というアメリカの特殊な性格が大切であることを学んだ。地方の小売店主であった父親は、事業の第一義的な目的が顧客や地域社会に奉仕することにならないのであれば事業をする意味がない、ということを少年時代の私に教えてくれた。また青年時代に未開地の経験をしたことが、自然に対する尊敬の念を教えてくれた。

スタンフォード大学経営学大学院の教育は大局観をもつことを教えてくれた。エチオピアに関する博士論文を執筆する過程で、私は集団行動のあり方の形成には文化の力が大きいことを学んだ。空軍特殊作戦学校の大尉やベトナム戦争時における国防省総務局の副官としての経験から、世界最強の軍隊が装備の悪い農民の軍隊の自己組織ネットワークに簡単に負けてしまうことを学んだ。ハーバード大学経営学大学院の教員としての聞き取り調査訪問は、大規模な組織システムの力学を理解するのに役立った。

フォード財団や国際開発庁から派遣されてアジアに駐在した時期に、地域社会における自己組織が積極的な力と潜在性をもっていることや、基本的な経済資源を地方が統制することの重要性を体験した。灌漑と林業にかかわる国の資源管理システムの統制を地域社会の手に移譲するという再編の努力に関与したが、成否はまちまちであった。いずれにせよ、私はこの経験から大規模な制度変革のための戦略を学んだ。アジアに駐在したこの一五年間に、私は次のような厳しい現実を学んだ。経済成長に基づく開発モデルは、大多数の甚大な社会的・環境的な犠牲において、小数を途方もなく裕福にしている。

*When Corporations Rule the World*⁵を書く際、私的の上場企業が本来的に破壊的で反

5 邦訳：『グローバル経済という怪物：人間不在の世界から市民社会の復権へ』デビッド・コーテン著、桜井文翻訳、シユプリン

ガー・フェアラーク東京 1997

市場的な企業形態であるということを理解した。The Post Corporate World⁶を執筆したおかげで、ウォールストリート資本主義経済とメイנסトリート市場経済の重要な相違と、適切に設計された市場システムが健全な生物システムの組織化の力学と原則を模倣している方法がわかるようになった。

ダイアナとアリシアという二人の娘をもった経験から次のことを肌で感じた。すなわち、ウォールストリートが経済を再編したために、若い専門職がわれわれの世代よりも経済的に自立することがずつと困難になっているということだ。

私は「グローバル化国際フォーラム」と企業主導の経済グローバル化に反対するグローバルな抵抗での経験を通じて、グローバルな市民ネットワークが広めている新しいストーリーが、歴史のコースをどうやって形作ることができるかを学んだ。分析をさらに掘り下げていくにつれて、私は金融市場の力がグローバル企業の力をさえ打ち負かすことがわかるようになった。

イエス！誌との関係から、みんなのために機能する世界を創造すべく実際に行動を起こしている人々について豊富な物語を知ることができ、それに基づいて可能性のある人類の未来に関する私のビジョンが明確になった。The Great Turnings⁷を書いたおかげで、人類がなぜ極めて深刻な危機に陥っているのかについての理解が歴史的に深くなり、行動病理を育み報奨する支配者の文化と制度が普遍

6 邦訳：『ポスト大企業の世界：貨幣中心の市場経済から人間中心の社会へ』デービッド・コーテン著、松岡由紀子訳、シユプリ
ンガー・フェアラーク東京 2000

7 邦訳：『大転換：帝国から地球共同体へ』デービッド・コーテン著、田村勝省訳、一灯舎 2009

的に存在し、それが歪んだ結末をもたらしているのだということについての意識が高まった。「地域経済活性化に向けた企業連合」とのかかわりから、私はメインストリート経済を基盤とした正義感と持続可能性のあるニューエコノミーを構築するチャンスは手中にあるのだという感覚が刺激された。このような多数のテーマのすべてが本書には描かれている。その多くは上述した拙著で詳しく扱われている。

ニューエコノミーの重要な側面を取り扱った他の論者の視点に関心をもっている方々のためには、他にも多数の資料がある。私の思索に貢献した多くの著作の一部を列挙すれば以下の通りである。

- Michael Shuman, *The Small-Mart Revolution: How Local Businesses Are Beating the Global Competition*
- Van Jones, *The Green Collar Economy: How One Solution Can Fix Our Two Biggest Problems*
- Riane Eisler, *The Real Wealth of Nations: Creating a Caring Economics*
- Bill McKibben, *Deep Economy: The Wealth of Communities and Durable Future*⁸
- James Gustave Speth, *The Bridge at the Edge of the World: Capitalism, the Environment, and Crossing from Crisis to Sustainability*

ニューエコノミーと公正で持続可能な憐れみ深い社会を創造することを意図した他のイニシアティブに従事している人々や組織に関する詳しい情報が欲しい人のために、もう一つの貴重な資料は私が会長をしているイエス！誌だろう。

自分の地元のメインストリート経済をニューエコノミーの手本に発展させることにかかわりをもちたいのであれば、「地域経済活性化に向けた企業連合」(BALLE: livingeconomies.org)と「アメリカ独立企業連合」(AMIBA: amibanet) という二つの全国組織が助けになるだろう。両組織はアメリカとカナダで活動しており、ともに地方の独立企業を強化し、独自のブランド色を構築することに献身している。

BALLEは健全で活発な地域経済のいわゆる建築用ブロック——持続可能な農業、緑の建物、再生可能なエネルギー、地域社会の資本、廃棄物ゼロの製造業、独立的な小売業——を強化するために、地方独立企業間の関係を発展させることに特に焦点を置いている。私はBALLEの理事をしている。

AMIBAは地方の独立企業(商業)に政治的な発言権を付与し、地方企業と全国展開している大企業の競争条件を平準化するためのルールを変更することに特に関心を払っている。私はAMIBAの諮問委員会の一員である。

私はワシントンDCの「政策研究所」(PS: psdc.org)のジョン・カバナー所長とともに、ニューエコノミーの政策を策定・推進するために、二〇〇八年末に創設された「ニューエコノ

ミール作業部会」の共同議長をつとめている。進歩派の議員や経済に関する教育と政策の普及に従事している多数の全国組織と協働しているIPSが、作業部会の事務局をつとめている。「ニューエコノミー作業部会」のウェブサイトも本書の刊行時までには立ち上がる予定となっている(neweconomyworkinggroup.org)。

私が運営しているウェブサイト (davidkortten.org と greeturning.org) でも最近の動きがわかる。ともに本書に関するグループ討議のガイドを含め、膨大な追加情報源へのリンクを張っている。いずれかのサイトに接続すれば、われわれが無料で発行している『大転換イニシアティブ』という電子ニュースレターを読むことができる。

デービッド・C・コーテン

davidkortten.org

目次

序文

iv

― 第I部 ― ニューエコノミー論

1

第一章 上流を見る

5

症状ではなくシステムを治療する

8

理論がないよりも悪い

9

ニューエコノミーのための新しいストーリー

13

上流を見る用意のある人に向けた本

14

第二章 現代の錬金術師と金儲けというスポーツ

17

幻の富

18

日よけをかぶった錬金術師

29

第三章 真の市場という代替策

33

ウォールストリートとメインストリート

33

法人企業

36

市場という代替策

38

市場という修辭法をまとった資本主義

40

第四章 小手先細工以上のことを 45

全ては終わった

45

サックス…痛みを伴わない微調整

48

スペース…方向転換と再設計

51

— 第Ⅱ部 — ウォールストリート排除論

57

第五章 ウォール街が本当に望んでいること 61

経済を「近代化する」

62

投機の銀行業

66

階級闘争に勝利する

68

第六章 海賊と私掠船 73

植民地時代の始まり

74

公海における冒険家

75

私掠船

76

特許会社

78

第七章 幻の富がもたらす大きな対価 83

幻の期待

83

現実から切り離され統制がきかない

85

有限な地球上における永続的な成長

88

健康、幸福、隣人に負けまいと見栄を張ること
限度のない真の富 95

第八章 帝国の終焉

99

帝国への転換

新しい国家の誕生

長い闘争

叙事詩的な機会

110 107 103 100

— 第三部 — 真の富の経済に向けたアジェンダ

115

第九章 人々が本当に望んでいること

119

われわれ人間の本質

われわれの夢の世界

転換を航海する

131 124 120

第十章 必須の優先課題

135

われわれの新しい状況に適応する

安全と豊かさのために組織する

ウォールストリートの経済的グローバル化のアジェンダ

ニューエコノミーにおける配分にかかわる優先順位

140 136

148

146

第十一章 メインストリートを解放する

155

ニューエコノミーのための新しいルール	
ニューエコノミーのアジエンダ…一二項目	160 157
第十二章 真の富の金融サービズ業	181
債務、利息、幻の富を増やせという圧力をへらす	182
思考実験	184
金融サービズ業のアジエンダ	186
どう対処すべきか？	190
第十三章 真の富の経済下での生活	197
— 第IV部 — ストーリーを変えて、未来を変えよ	
第十四章 オバマ大統領にいつかは国民向けにやって欲しい演説	211
第十五章 人々がリードすれば、リーダーはついてくる	227
大変革はどのようにして起こるか	228
二つの歴史的な独立運動	232
何百万人ものリーダー	240

注

1

